



わたしの日本日記 — ツルの中に入っているTOKYO

翻訳 木下哲夫

あのアン・キャリントンが突然、編集部にやって来ました。
ロンドンの街に捨てられた生活廃棄物を、ファンシーなおブジエに仕立て上げてしまおう彫刻家
アン・キャリントンのことが日本で初めて紹介されたのは本誌「昨年2月号」でした。
何でもNTTのポスターになるために、作品を抱えて来日したというのです。
たぶん皆さんがこの記事を眺まれる頃には、街のあちこちで、
ブリキ製のびかびかのさやえんどうの頭には、おブジエを抱いた
アンのチャーミングな笑顔に出会うことでしょう。

そこで「アンの質問!」東京のゴミについてご意見をどうぞ。
そしたらロンドンに帰ってすぐ送ってくれたのがこのコラムです。(編集部)

わたしの彫刻作品は、街で目につくゴミを通じて見た世界を愚かされたように記録した日記とスケッチブックをもとに制作されます。ありきたりのものから、魔法のような魅力を持つものまでを創りたいです。つまりゴミをひとの欲しがらるものに変えること、それがわたしの仕事です。どぶに捨てられた品々から靈感を得て作られたわたしの彫刻は、そうした事態を起す引き金となった使い捨て文化や生産過剰で浪費的なわたしたちの文明、そして自然の乱開発を率直に批評します。

本が表紙によって判断されることがあるように、都会もそれが生み出す廃棄物によって判断されるでしょう。ですから、世界でも最先端の浪費社会である東京の姿は、ゴミの中に映っているともいえるのです。

最新の技術、最新のデザインを愚かされたように追い求める社会では、去年の型でもゴミ箱行きとなります。次々とゴミを生み出して行く東京が、世界でも屈指の無駄遣い社会であることはまちがいないありません。

厳しい表情をした群衆、交通渋滞、そして狭い路地は閉所恐怖症的な東京の特徴を示しています。ロンドンであればこうした条件は直ちに治安の乱れや犯罪、そして何マイルも続くゴミの山に結びつくはず。ところが東京ではまさにその正反対に、社会の底流に秩序感覚があるため、街は穏やかで犯罪もなく、しかも清潔このうえありません。まともなゴミを探すとすると鳩の目、鷹の目しかも見つけたら一瞬の猶予もなくサッと手を伸ばさなくてはならないほどです。

東京の魅力と美しさは、ほかの都会とは違って、コンクリートで固められた表面の裏に隠されています。そこには古いものと新しいものが共存していて、京都と奈良の年経た伝統が現代的な生活のあちこちにしっかりと織りこまれていのです。技術の粋を集めたオフイス街と肩を並べるように神社が建ち、またキオスクには達筆な書が人びとの注意を引こうとして、クズのような漫画的イラストと競いあっています。わたしが蒐集した紙クズの数々にも、こうした精神分裂的なデザイン感覚が反映しています。日本人はミニマリズムの巨匠であると同時に、キッチュの大家でもあるのです。



アンの作品「さやえんどう」

東京の文字と美しさは、ほかの都会と違って、コンクリートで固められた表面の裏に隠されています。そこには古いものと新しいものが共存していて、京都と奈良の年経た伝統が現代的な生活のあちこちにしっかりと織りこまれていのです。技術の粋を集めたオフイス街と肩を並べるように神社が建ち、またキオスクには達筆な書が人びとの注意を引こうとして、クズのような漫画的イラストと競いあっています。わたしが蒐集した紙クズの数々にも、こうした精神分裂的なデザイン感覚が反映しています。日本人はミニマリズムの巨匠であると同時に、キッチュの大家でもあるのです。

日本の文字の目新しさ、新鮮さがあるために、平凡このうえないゴミの見本が限りなく好奇心をそそる刺激的なものになりました。わたしにとって日本の文字に触れる体験は、文字を書く人に畏怖すると同時に、文字を純粹に抽象的な形として楽しみながら、それを読むことはできないという幼い子供の受ける印象に通じるものだろうと思います。

用語解説

「ミニマリズム」Minimalism: ミニマルというは、最小限の、ということですが、アートの場合は色と形という表現の最小限の要素で作品を作ることで、表現の純粋性を求めようとする行き方をいいます。カール・ランドやクラウク・ステラなどの作家に代表されます。ここでは現代美術の用語を多数に於いて、日本の書や神社のシールな造形を、表現要素の最小限主義「ミニマリズム」だと捉えています。

「キチュ」Kitsch: 通俗的なとか浅薄な作品、まがいもの、といった意味。私達の回りの見回すといかにも、本物とそっくりのもの、それが氾濫していることに驚きます。ほんのり、そのくくりのプラスチック製の旅行とか、屋根裏部屋にも無いくせに飾りだけのために、屋根の下に積んでおく窓が、ついているヨーロッパのプレッファ住宅、ヨーロッパのお城とそっくりの何となくバブル結婚式場、もう一つ外国の旅行者が日本で必ず驚くものには、レストランや食堂の料理とそっくりの見た目がありまます。アンのような旅行者から見ると日本はどうしたキチュのワンダーランド(不思議の国)に見えるもそうです。中には有名ブランドの商品のそっくりさん店が並んで、わざと偽物の店と断つて売店が出現して、というに至っては草履の中、踏まれて本物信仰にたいするひびきかきさを感じて微笑ましくさへあります。ただしこの場合偽物の店と断ることに比べて、本出(本物の)偽物を断ることで、本物信仰の一翼を担うことになってしまっています。極く一般には「一品創作」高級品を大衆化するために「廉價創作」として起る通俗品出現現象を指しています。